

# News Letter



ウトウの巣穴

まだまだ寒さが残る2月下旬北海道の天売島ではウトウがコロニー(集団繁殖地)に姿を現します。ウトウはチドリ目ウミスズメ科の鳥類で、繁殖期以外は海上で暮らし、イカナゴ等の

小型の魚を主食として暮らしています。繁殖期は2月下旬～7月下旬で、日中の殆どを海上で過ごし、日没後、一斉にコロニーへ帰巣します。育雛は、草本等の植物が生育する土壤に穴を掘り、その中で行います。この穴は天売島の南端にあたる赤岩展望台付近の斜面に無数にあり、ここが世界最大のウトウのコロニーとなっています。

私は7月初旬に天売島を訪れました。羽幌町から天売島へ向かう航路で、5羽～10羽ほどの小群となってパタパタと海面際を飛翔移動するウトウ達が目に付きました。その後、ウトウを見ることができたのは日没時の赤岩展望台です。一斉に帰巣した親鳥を待つ幼鳥とウミネコ。親鳥が持ち帰った魚を奪うため、ウミネコも親鳥の帰りを待っていました。

日没後の大騒ぎが過ぎ、人もウミネコもウトウの親鳥も姿を消し、波の音しか聞こえなくなった午前零時頃、草むらから周遊道路に飛び出て走り回る黒い影。どうやら巣立ち雛のようです。何も知らない雛たちは一生懸命走る走る。私にぶつかっても恐れることなく、また走り始めました。ウトウの巣立ちは真夜中に行われ、ひっそりと力強く海へと向かいます。

## 天売島のウトウ



小群で飛翔するウトウ



ウトウとウミネコ(餌の争奪戦)



餌を捕られたウトウの親鳥



餌を捕られたウトウ親鳥と親を待っていた幼鳥

近年、網を使う漁による混獲や油汚染等の人為的要因でウミスズメ類の生息数は減少しています。日本に生息するエトピリカやウミガラスの生息数は顕著に減少し、現在では絶滅の危機に瀕しています。

ウトウは? というと、ロシアのモネロン島では一時期激減しましたが、天売島では現在約30万羽～60万羽が生息しており、モネロン島のウトウや日本に生息するエトピリカ、ウミガラスのように顕著な減少傾向は見られません。しかし、1997年1月に中国四国地方で起きた「ナホトカ号重油流出事故」では、合計486羽のウトウが重油の犠牲にあって漂着しました。また、ウトウは潜水を行って餌を捕るため、漁の定置網や流し網に掛かり溺死するという事故も多く発生しています。

ウトウを始めとするウミスズメ類を絶滅に追いやる力は、悲しいことに、間違いなく人の力です。しかし、絶滅に瀕したウミスズメ類を救うのも人の力です。救うというより自分の尻を拭うと言った方が正しいかもしれませんが、私は救うという言葉を礎にこれからも鳥好きであると思います。

(北海道支社自然環境調査室・松岡和樹)

### 参考文献

- まもろう鳥みどり自然((財)日本鳥類保護連合 1997)
- 島の野鳥(寺沢孝毅 2000)
- 極東の鳥類17 海鳥類特集(極東鳥類研究会 2000)



ウトウの幼鳥

### 目次

エッセイ	天売島のウトウ	1
話題	注意! マダニやツツガムシの媒介性感染症	2
マンガ	調査員物語	5

Reports	植物の移動	6
	ある日のフィールドノートから セッカ	8

注意!

## マダニやツツガムシの 媒介性感染症

春の息吹でいっぱいの野山を楽しむ季節になりました。しかし、この時期、マダニやツツガムシも宿主を求めて一斉に動き出します。春を満喫するためにも、彼らの存在と感染症のことを頭の片隅にいられておくことをおすすめします。



写真1 チマダニ属の一種

### マダニに刺された!

### 体験記

#### 茶色いすじ状の汚れが動く

もう10年以上も前の話である。北海道の道南地方で昆虫調査をしていた。季節は6月。調査を始めてまもなく、ズボンに茶色い汚れがすじ状に付いていることに気づいた。

「何かの花粉か泥がついたかな?」と思い、あまり気にすることなく目を離そうとすると、なぜかすじ状の汚れが動いたように感じた。

「おや」と思い、よく見ると...!! すじ状の汚れと思っていたものは十数匹のマダニであった。「いったい、いつ、どこでついたのだろう」と思い、試しに林道沿いのササ藪に体をすりつけてみた。ズボンやシャツの袖は見事なまでにダニ模様となった。

その後、少しの間、極力下草にさわらないように調査をしていた。

が、まったく下草にさわらないで調査することは、土台無理な話である。途中からはあきらめて、ガシガシと林内に分け入っては調査をし、開けたところに出たときにまとめて振り落とすようにしていた。

ところが、敵は意外にしっかりしがみつки、さらに体が極端に平べったいため、けっこう取りづらい。とはいえ、幸いにも、マダニの動きはかなりとろく、「こんなのろいやツには刺されん!」と完全になめきっていた。それでも、車に乗って移動するときなどは、マダニが体や捕虫網についていないか入念にチェックすることを欠かさなかった。

調査が終了し、車で宿へ向かおうとすると、一緒に調査をしていたN女氏の挙動がおかしい。自分のまつ毛の上を歩いているマダニに気づき、捕まえようとしてあろうことが車内に落としてしまったらしい。丹念に探してみたものの結局見つからず、そのまま宿へと向かった。

#### 頭部まで食い込んだマダニ

宿に着き、荷物をといて夕飯を食

べ、しばしの間くつろいだのち、風呂に入ろうとすると、下腹部に茶色いゴミのようなものがついている。マダニであった。頭部までしっかりと食い込んでおり、つつくと足をばたばたさせる。かなり深く食い込んでいるにもかかわらず、刺されたこと自体に全く気が付かなかった。

「他にも刺されているではないか」と目で見える範囲は目で、見えない部分は手でさぐって身体をチェックすると、尻に剥がれかけた『かさぶた』が付いているような触感が!!ズボンの上から無意識に搔いたためか、このダニは完全に死んでしまっていた。とりあえず、下腹部のダニをとるため、たばこの火を近づけたり、離したりしてみたが、なかなか自分から離れてくれない。そのうち短気を起こし、たばこの火をつい近づけすぎて、こちらのマダニも絶命してしまった。どちらのマダニもすでに死んでいるにも関わらずしっかりと食い込んでおり、引っ張ってもとれる気配がない。結局、力任せに引っ張ってとったのだが、口器の一部は、しっかり皮膚に残ってしまっ

## マダニ媒介性感染症

表1 マダニ媒介性感染症の発生場所、原因、症状、処方薬

種類	発生場所	原因	症状	処方薬
日本紅斑熱	千葉県、兵庫県、島根県、三重県、高知県、徳島県、宮崎県、鹿児島県等。主に西日本中心。	ヤマトマダニ、タカサゴキララマダニ、キチマダニ、フタトゲチマダニ等が媒介。	マダニに刺されてから2～8日後に頭痛、発熱、悪寒戦慄を伴い発症。熱は1日のうちに上下する。 発熱が2～3日続いた後、手足(手のひらを含む)、顔面に米粒から小豆くらいの大きさの斑点が多数出て、数時間ですみやかに全身に広がる。 紅斑は後に出血性(皮内で)となるが、2週間くらいで消失する。刺し口は5～10mmの赤く円いしこりで、中心が水ぶくれや黒いかさぶたになる。	ツツガムシ病と同様テトラサイクリン系の抗生物質が特効薬。
ライム病	北海道から九州まで発生するが特に北海道で多い	おもにシュルツェマダニが媒介。	マダニに刺されて数週間(30日以内)に刺し口を中心に遊走性紅斑(刺し口に生じた紅斑が、しだいに環状となり、外へ外へと大きく広がっていく)があらわれ、発熱、疲労感、腰痛、リンパ節腫脹等をもって発症。ただし、特徴的な紅斑がみられない例もある。 その後、症状が進むと、神経症状(髄膜炎、顔面神経痛)、筋骨格痛、不正脈、眼症状、膝関節等の大きな関節の関節炎等を起こす。	ペニシリン、テトラサイクリン、エリスロマイシン、セフトリアキソンなどの抗生物質の投与がきわめて有効。
野兔病	東北、北海道で多い。	シュルツェマダニ、ヤマトマダニが媒介。 マダニに刺咬もしくは野兔病菌を保有するノウサギとの接触で感染することが多い。 野兔病の細菌は感染力が非常に強く、人の健康な皮膚でも通過し感染する。 その他、感染した動物を吸血したカ、ノミ等の吸血昆虫や感染動物との接触、感染動物を捕食した動物(イヌ、ネコ等)の咬傷により感染。	潜伏期は通常3～5日(1～21日)で高熱とともに発症し、リンパ節の腫脹がみられる。人の場合はめったに死亡することはない。	

### 予防

- ・長袖、長ズボン、首に手ぬぐい、長靴、手袋等を着用し、なるべく素肌をさらさないようにする。
- ・マダニ類の吸血活動期(春から秋まで)はいつでも発生する可能性がある。
- ・マダニ類はササ類等の葉先等に集まり寄主が通り過ぎたときに寄生する。野山に入った後は、衣服、体をよく点検する。ツツガムシ幼虫と異なり体が大きいものが多いため、視認しやすい。
- ・刺された場合、マダニが生きていればタバコなどを近づけては離しを繰り返し、自分から離れるのを待つ。マダニの口器は逆棘があり、さらに、セメント物質を分泌して固着している。無理に引っ張っても頭部や口器がちぎれて皮膚内に残る。

マダニがすでに死んでしまっている場合や口器等が皮膚内に残った場合は皮膚科で切除する方が無難。刺されてから24時間以内に対処すればたとえ病原体を保有する個体であったとしても感染する確率は低いといわれる。

### 対応策

- ・マダニ類に刺された後に、ツツガムシ病に類似した症状(赤く円いしこりや、その中心の水ぶくれや黒褐色のかさぶた状の刺し口、リンパ節の腫脹、発熱・頭痛・倦怠感・筋肉痛等の風邪に似た症状、粟粒大～小豆大の発疹)や大きな紅斑等があらわれた場合には、いずれかの感染症にかかった可能性がある。すぐに病院へ行き診察を受ける。
- ・ツツガムシと同様、野外で採集した山菜

や衣類等とともに家庭内に持ち込まれ、感染する可能性がある。このため、家庭内であったとしてもマダニ類に刺されたのち、上記症状が現れたらいずれかの感染症を疑う必要がある。



写真2 チマダニ属の口器

た。2匹のうち少なくとも1匹は、N女氏が車内で落としたヤツなのではないか、といまだに疑っている。

### マダニが伝播するライム病

会社に戻ってから、食い込んでいたヤツと共に採集してきたマダニを実体双眼顕微鏡で検鏡してみた。マダニの正体は、北海道や東北地方に広く分布するシュルツェマダニであった。口器(口下片)には逆とげ

がびっしりと並び、実におぞましい形状をしている(写真2)。ダニ関連の本によると、宿主に吸着すると、まずセメント物質を含有する唾液を分泌して、口器を確実に固着させるらしい。「これは引っ張っても抜けないわ」と思いながら別の文献を読むと、「ソ連では春秋脳炎の伝播者として注目されている」という記述がある。にわか

二は国内でもライム病を伝播することを知った。

幸いにもライム病に感染することはなかったが、刺し口に口器の一部が残っていたためか、化膿してしまい、病院で摘出手術(といってもたいていそうなものではなく、口器が残っているとおぼしきところの皮膚をちょっと切り取り一針二針縫う程度のものであったが)を受ける羽目になった。病院では念のためライム病

## ツツガムシ媒介性感染症

表2 ツツガムシ媒介性感染症の発生場所、原因、症状

種類	発生場所	原因	症状
古典型ツツガムシ病	新潟県(阿賀野川流域、信濃川流域)、山形県(最上川流域)、秋田県(雄物川流域)の河川敷草地がおもな感染地である。古くから恐ろしい風土病として知られ、致死率が高い。	媒介種はアカツツガムシで、幼虫の発生時期である夏に発症が多発する。近年、各河川の改修工事によって、アカツツガムシの好適な生息環境が減少するとともに、発症数も激減している。	刺し口が嵩瘤状となり、1～2週間後には数日から1cm程度の黒褐色のかさぶた状となる。 刺し口付近のリンパ節が母指頭大～鶏卵大に腫脹し、圧痛を伴う(新型ツツガムシ病では現れない場合がある)。 刺咬部位は頭頸部、腋、腰、太もも、陰部等の比較的柔らかい皮膚に多い。 刺されてから7(10)～14日が高熱(39～40)とともに悪寒、頭痛、咽頭痛、倦怠感、筋肉痛(四肢痛)を伴い発症。高熱は2～3日間で一旦下がる場合がある。 3～5病日で粟粒大～小豆大の発疹(淡紅色、斑紋状、丘疹状で時に出血を伴う)がほぼ全身に現れる。
新型ツツガムシ病	昭和50年代に入り、全国的(北海道、沖縄を除く全都府県)に多数の患者がみられる。現在でも患者数は年間数百名にのぼる。	媒介種によって大きく二つに分けられる。 フトゲツツガムシ タテツツガムシ	古典型ツツガムシ病と同様、古典型ツツガムシ病と比べると致死率は低いものの、毎年死亡例がある。
	フトゲツツガムシによる		
	秋、春に全国的に発生。特に東北、北陸地方に多い。	フトゲツツガムシが媒介。	
	タテツツガムシによる		
秋、冬、春に伊豆七島、富士山麓、鹿児島県、宮崎県などの太平洋側を中心に発生。特に関東以西に多い。	タテツツガムシが媒介。		
その他(トサツツガムシによる)			
四国型ツツガムシ病と呼ばれ、高知県白田川地方、香川県馬場地方の海岸に近い集落で夏に発生した。	トサツツガムシが媒介。	トサツツガムシが媒介種とされる致死率の高いツツガムシ病が知られるが1955年以降に発生はないようである。	

### 予防

ツツガムシ幼虫は体長0.2～0.5mm程度で体色はオレンジ色である。肉眼では視認しづらく、また、皮膚上を歩行している時や吸着時には何の自覚症状もないため、刺される前に発見することは難しい。以下に一般的な予防策をあげる。

- ・長袖、長ズボン、長靴、手袋等を着用しなるべく素肌をさらさないようにする。
- ・直接地面に座ることをさける。直接座る場合にはなるべく草むらを選び、裸地を選ぶ。トサツツガムシ幼虫はネズミの坑道内や地表面で、フトゲツツガムシ幼虫は地表面や地表の枯れ枝、背の低い草の先端等で集団になり宿主への寄生の機会をうかがっている。
- ・市販の防虫スプレーを素肌部分及び靴や

靴と靴下の間などに塗布する。

- ・野外活動後はよく体を洗う。
- 以上の予防策は、万全ではなく、どんなに気をつけても野山に行くかぎり、100%刺されないようにすることは難しい。発症した場合の早期診断と適切な治療が、この病気への最善の対応策となる。

### 対応策

- ・黒褐色のかさぶた状の刺し口、リンパ節の腫脹、発熱・頭痛・倦怠感・筋肉痛等の風邪に似た症状、粟粒大～小豆大の発疹といった症状のうち、いくつかの症状が現れた場合は、ツツガムシ病に感染した可能性が高い(全て現れればほぼ確実に感染)。すぐに病院へ行き、ツツガムシ病に感染した可能性を告げ、診察を

受ける。

- ・症状が、風邪やウイルス感染、中毒、薬物による発疹と似ているため、誤診される可能性がある。適切な治療が早期に施されなかったための症状の悪化や死亡例がある。診察結果に疑問があれば、迷わず他の病院へ。
- ・新型ツツガムシ病はほぼ日本全国各地でも感染する可能性がある。また、山野に限らず、自宅の庭や部屋の中の植木鉢の土壌が感染源になった例もある。山菜や土を野外から持ち帰った場合にはツツガムシ幼虫が持ち込まれ、感染する可能性も考えられるため、本人が野外活動をしていない場合でも、上記のような症状が現れたらツツガムシ病を疑う必要がある。

等の感染症の疑いがないか聞いてみたが、担当医はそんな感染症が存在することすら知らないようで、素っ気ない対応であった。

### マダニ、ツツガムシ媒介性感染症

国内におけるマダニ媒介性の感染症には、ライム病の他に、紅斑熱、野兎病などがあり、患者数は年々増加傾向にあるという(実際にはライム病や高熱斑と的確に診断されるようになって

きたという方が正しいようである)。

ツツガムシが媒介するツツガムシ病は、かねてから東北地方で発生する著名な感染症として知られていたが、近年は北海道、沖縄を除きほぼ全国的に広く発生することが知られている。マダニ、ツツガムシとも、決して珍しい生き物ではなく、比較的身近な場所にも生息している。刺されたからといって必ずしも感染症

にかかるわけではないが、たまたま刺された個体が、病原体を保有していれば、感染症にかかる可能性は高くなる。

いずれの感染症も適切な治療を行うことで完治するため、必要以上に恐れる必要はない。とはいえ、適切な治療がなされなかった場合は死に至ることもあり、あなどれない存在である。

(東京本社自然環境調査室・宮畑貴之)

# 調査員物語

このヘタレーっの巻

北海道支社長代理  
中島正雄  
営業担当



あれ、ひとりで何浮かれてんの?



なぜって、オレは哺乳類が専門ですからね。営業の方もやりがいあるけど、調査に出られるのが嬉しいんです。



ヒビさん! ここ北海道では特有の哺乳類がみられますよ〜



例えば、フィールドの木にウロがあったとしますよね... ちょっとたたいてみましょう。すると...



エゾモモンガが顔を出したりします。



...といった具合でわりと容易に動物が見られるのです。



東京などの雪に慣れてない人たちは北海道の積雪にビックリするかもしれませんが、動物調査する我々にはむしろ、雪の方が動物の気配を身近に感じることができます。



シマリスは冬眠していると思われていましたが、近年、晴れた日は活動していることがわかりました。



最近、道東ではヒクマがハンターの捨てたエゾシカを食べ、冬眠しない個体が見られるという事です...



...だってさ。どーする? えー!? 今日、オレ鳥類調査で来るんだから喰われる役は中島さんです。



お! ウロ発見! 何かいるかな?



ギョウ...



ギョウ...



あ〜、もうこのヘタレ! (腰又ケ) せ、かくエゾクロウがいたのになあ、もう!



ヤダ! 中島さん、じゃ営業のほかに土日の現場もおねがいね♡ ラッキー。

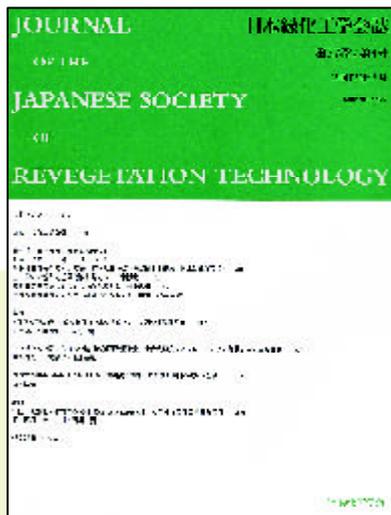


そりゃそーとー恥ぢだね



何言ってるの? そういうこともあるから現場は楽しいじゃないの、またオレ行きたいよ。





- 日本緑化工学会の提言「生物多様性に配慮した緑化」より

## 植物の移動

私の調査分野である植物は、種子の分散によってその分布域を大きく広がります。自然の生態系の中では移動分散にも限界がありますが、明治以来海外や国内での人の活動が活発になるにつれ、その距離は拡大し様々な帰化植物の定着を捉してきました。

一方、環境影響評価においても、生態系が調査項目として加わり、特に「生物多様性の保全」という言葉が浸透しつつある今日この頃です。

また、何らかの環境保全措置を行う際、その地域の生態系に対して遺伝子の攪乱は避けねばならないということも周知の概念になりつつあります。

植物分布、分布植物の遺伝子、ひいては生態系に大きな影響を与える人間活動として、人や物流に伴って侵入してくる様々な帰化植物、環境保全措置としての緑化という行為が挙げられる

と思います。私たちは、その地域に望ましい生態系を構築する植物が何なのかをよく熟慮し、それを実現するべく対策を講じていくべき時期に来ているようです。

最近のこういった動きの一つとして、2002年2月に日本緑化工学会から提言された「生物多様性に配慮した緑化」の概要を紹介します。

植物の人為的な大規模移動、侵入を引き起こす緑化方面における役割の重要性は大きく、ここまで具体的に書かれた提言は画期的であると思います。

日本緑化工学会誌 第27巻  
第3号特集「生物多様性に  
配慮した緑化」より  
引用、抜粋

どのような植物と地域で  
問題とすべきか

植物の取り扱いによって生じる3つの問題 - 「侵略種」「雑種形成」「遺伝子レベルの攪乱」 - を防止するための植物と地域についての概念的枠組みを整理します。

### 「植物」について

緑化植物を取り扱う際は3つの問題に対し、必要な対策を講じるべきです(表1)。植物の扱いは地域の取り扱いに優先します。植物種の分布様式は多様であり、地域区分によってどの種も同様に取り扱いえるとはいりません。

### 「地域」について

緑化植物を取り扱う際は、いかなる地域であろうと、緑化によって本来生育していない種や系統を持ち込んで生態系を攪乱したり、対立遺伝子の構成

に影響を与えて遺伝的な多様性を攪乱したりする危険性について、配慮しなくてはなりません(表2)。

### 生物多様性保全に配慮した緑化の調査計画で配慮すべき事項

生物多様性保全に配慮した緑化を行う

には、生態系の広がり・連関と時間的変化の見通しが必要です。配慮事項は

- 計画段階からの関与
- 緑化植物導入の地域生態系影響評価
- 立地ポテンシャル評価と緑化目標の適切な設定
- 緑化目標とその時間設定

表1 植物を取り扱う際の問題点

問題点	内容
生態系の攪乱	移入種は、移入先の生態系の空いた生態的地位を占めることが多い。しかし、在来の自生種と競争的な関係になる場合もあり、その場合には生態系に及ぼす影響は深刻になる。
浸透性交雑	異所的に分布する種の間には生殖的な隔離機構が発達していないことも多いので、分布域を越えて植物を植栽することによって、雑種が形成されることがある。
遺伝子レベルの攪乱	種内の変異は、自然選択の働かない非中立的なもの、中立的なものがある。中立的な変異はその集団の進化の歴史を反映していることが多いので、変異を出来る限り保全することが望ましい。

表2 植物を取り扱う際の地域の考え方 - 4つの保全レベル

地域	概要	対象
遺伝子構成保護地域	緑化による対立遺伝子頻度の変化を避けるため、植物の導入は一切行わない。	・原生的な自然を有し記念物的な価値の高い地域 ・学術的理由から植物の人為的移動を認めない地域
系統保全地域	緑化にあたって、その地域に新たな対立遺伝子を持ち込まないように自生する系統を用いた緑化を行う。	・島嶼、高山、河川、湿地等 ・自然保護を図る地域
種保全地域	緑化には自生種を用い、その系統は問わない。逸出を防ぐ手当が可能ならば交雑によって作出した種子繁殖力を持たない緑化植物の使用が可能。	
移入種管理地域	植栽植物が自然生態系に逸出しないように管理しながら移入種植栽が可能。	・上記3つ以外で自然生態系から隔離された地域

緑化植物の生産と供給

地域性種苗の利用について

遺伝子構成保護や系統保全が必要な地域では、他地域からの植物材料の導入を避け、地域性系統を用いる必要があります。しかし、種内の地域的な変異を形態から識別するのは困難です。

この対策として、種苗に原産地記載を施した「地域性種苗」を使用することが考えられます。その供給体制を模式図(図1)に示します。

外来種の移入について

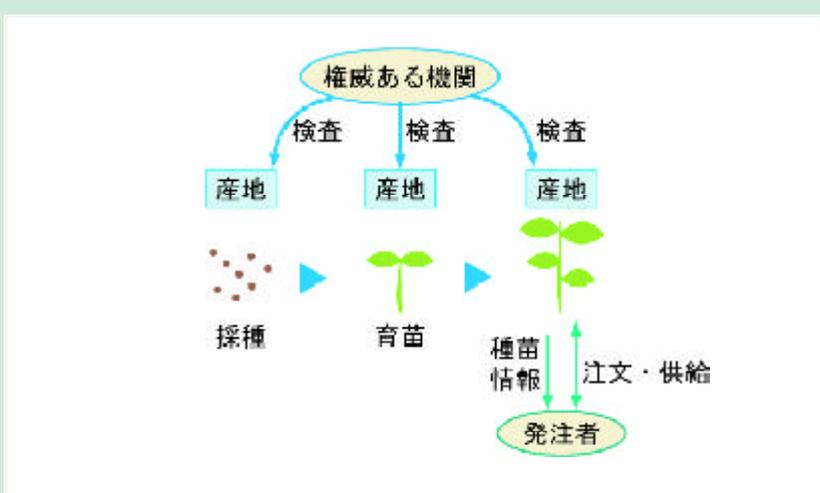
外来種(植物では帰化植物)の移入という点では、「外来種ハンドブック」(日本生態学会,2002)に、日本における生物の輸入規制に関わる主な法律とその目的がまとめられています(表3)これらは、人の健康に直接関わる種や経済的産業的被害の大きな種を対象にしており、こと一般植物の輸入、特に一般植物についてはほとんど規制がないというのが現状ではないでしょうか。

こういった侵入の「無法地帯」である日本の現状と、外来種に対する国民意識の変化により、2002年にまとめられた内閣府総合規制改革会議の「規制改革の推進に関する一次答申」の中に、外来種に対する必要な施策が示されています。

外来種に対する法整備の際に求められる考慮点

- 外来種導入に関するリスク評価
- 導入された外来種の管理を適正に行うための対策
- 問題を起こした外来種の駆除や制御に関する対策
- 在来種利用への切り替え

(内閣府総合規制改革会議の「規制改革の推進に関する一次答申」より)



地域性種苗は、産地が明らかでない種に比べて、生産に手間を要するため、価格の差別化を行う。種苗と供給業者に対する定期的な検査  
原産地記載には、出来る限り場所が明らかな記載  
母樹園の整備、信頼性の高い業者の育成  
契約生産  
公共事業体直営の種苗生産  
野生植物資源利用における倫理  
現場産種苗の再利用

図1 地域性種苗の供給体制 模式図

表3 日本における生物の輸入規制に関わる主な法律とその目的

法律名	規制対象	所管
外国為替及び外国貿易法	CITES対象種	経済産業省
植物防疫法	農作物への有害動植物	農林水産省
家畜伝染病予防法	家畜	農林水産省
感染症防止法	サル類	厚生労働省
狂犬病予防法	イヌ、ネコ、アライグマ、キツネ、スカンク	厚生労働省

CITES対象種

附属書

絶滅のおそれのある種で取引による影響を受けているかそのおそれのあるもの

附属書

現在必ずしも絶滅のおそれのある種ではないが、その取引を規制しなければ絶滅のおそれのある種となるおそれのあるもの

附属書

いずれかの締約国が自国内で規制を行う必要があり、同時に取引の規制のために他国の協力が必要な種

余談ですが、農業の害草に関する研究を行っている人が、雑草の種がたくさん混ざったトウモロコシコンテナ船から山のように荷揚げされるのを見て、「これは規制しても帰化植物の侵入を防ぐのは無理かと思った」と言っ

ていました。このような現状は仕方ないとして、法整備やその他管理などに際して「まだまだなすべきことはたくさんあるのでは」と思う今日この頃です。

(大阪支社自然環境調査室・松原徹郎)

春がきたことを感じる鳥といえば、ウグイスを思い浮かべるだろう。桜の花とウグイスは極めて日本的な情緒あふれる風景である（実際にはメジロと桜の組み合わせが多い）。その他、私にとって春を感じるというが繁殖期が始まったことを感じさせる鳥はセッカなのである。



右：セッカ（バンディング調査  
写真提供・齋藤武馬氏）  
左下：セッカの巣

さて、繁殖期以外は何をしているのだろうか。「えっ、冬もいるんですか」という人もいるくらい、冬は存在感がない。冬の水田などで、草の根元でジッとしている個体を見かけることがある。繁殖期にあれだけ忙しかったのだから、冬はなるべくエネルギーを使わないようにしているのだろう

ある日のフィールド・ノートから

セッカ（雪加）

セッカは春からなわばりを確保するため、その独特なスカイダンスを始める。他の鳥がさえずりをしなくなる時期でも、真夏の暑い日、水田の上空を「ヒッヒッヒッ」と鳴きながら上昇し、今度は「ジクジクジク」と鳴きながら降下する姿は実に印象的である。夏の強い日差しを避け一息いれている時、何度となく繰り返すこの光景を見てみると、私は思わず「頑張ってるなあ」と感じ入ってしまう。このスカイダンスは9月中旬まで見られる。他の鳥が繁殖を終えて繁殖地である河原の草がひっそりとしている中、それでもセッカはスカイダンスを繰り返し続けている。この小さな鳥のどこに、春先から秋口までスカイダンスを続ける驚異的なスタミナがあるのだろうか…不思議である。

さて、セッカはこのような目立つスカイダンスの他、もう1つ隠れた能力を持っている。その成果がセッカの巣である。晩秋に草地をかき分けて進んでいると、スキの中程にセッカの巣を見つかることがある。光線の加減によって、銀色に輝くワイングラスのようにも見える美しい巣である（写真では伝わらないのが残念）。セッカは細い嘴を使ってクモ

の卵囊から取り出した糸を、スキの細い葉に巧みに綴り込み、また、白いスキの穂を内壁にはりつける等、内装にも細かな細工を施している。鳥の中でも最も美しい巣を造るグループに入っているのではないだろうか。機会があれば是非探していただきたいと思う。

セッカは、美しく精巧な巣を10日に1個というハイペースで造る腕の良い大工でもある。平均すると約6.5個の巣を1シーズンで造るが、18個の巣を造った強者もいる。単純に考えると、繁殖期のほとんどの日数を巣を造ることに費やしているといえるだろう。四六時中、派手なスカイダンスをしているように見えて、スカイダンスを終えて草むらに飛び込んだ後は、地道に巣造りに没頭しているのだろうか…ずいぶん忙しい鳥である。これは多くの巣を造った雄ほど多くの雌を獲得する傾向があるため、スカイダンス同様、巣造りも必死に頑張っているわけである。

か。とにかく動かない、鳴かない、地味で見つけにくい。そこに夏の活発なイメージはない。セッカの雄は繁殖期にエネルギーの全てを注ぎ、非繁殖期は来るべき繁殖期にそなえ、厳しい冬をただジッとやり過ごしているのだろう。繁殖のために労力を惜しまない。そのことは他の鳥類にも共通していえるが、これほど繁殖活動に全力を傾けている鳥はそういないのではないだろうか、繁殖のためだけに生きている、そんなストイックな面を強く感じさせる鳥である。

4月、セッカの季節が再び始まると、各地の河原や水田でその元気な姿が見られるだろう。ウグイスのさえずりは、年度末の忙しさから解放されたのも手伝って心身ともに癒されるような気がする。しかし、セッカのスカイダンスは忙しい繁殖期の始まりをイメージさせる。鳥の調査では、これから繁殖の確認に忙しい時期が始まるからである。「俺も頑張らなきゃな」とぼんやりとしている頭にせつつかれるように春を感じさせられるのである。

（東京本社自然環境調査室・平川正詩）

ご意見 ご質問  
お待ちしております

素朴な疑問やご感想など下記のアドレスまでお寄せください。お待ちしております。

E-mail :nl-info@chiikan.co.jp

編集後記

この春は桜の開花予想の報道をよく目にしませんでしたが？昨年まで隔週だった気象庁の発表が、今年から週に一度に変更されたそうです。ここ札幌では桜はまだ小さい蕾。今現在、5月1日の開花予想となっています。開花の基準となるのは街の片隅のソメイヨシノです。この樹は例年、今時季から春を待ちきれない情報番組で紹介されるのですが、毎年どこかの番組で行われる「お約束」のやりとりがあります。スタジオのアナウンサー「少しでも開花宣言が早まるように、下でジンギスカンをして暖めてきてください」中継レポーター「…。」昨日、会社帰りに例の樹を訪ねました。周囲の樹よりも心なしか蕾が白く大きいように思えたのは、春の訪れと、お花見という名のジンギスカンが待ち遠しい市民の期待によるものなのかもしれません。（釣谷佳子）

News Letter NO.18 2003年4月

【発行】.....株式会社地域環境計画

発行人.....高塚敏

編集中山香代子・伊藤透・鈴木志保子・釣谷佳子・高岡由紀子

東京本社 〒154-0015

東京都世田谷区桜新町2-22-3 NDSビル

TEL 03-5450-3700 / FAX 03-5450-3701

営業窓口...鈴木志保子・伊藤透・高岡由紀子

大阪支社 〒569-1123

大阪府高槻市芥川町1-15-18 ミナミ芥川ビル

TEL 072-684-3182 / FAX 072-684-3184

営業窓口.....中山香代子

北海道支社 〒001-0017

北海道札幌市北区北17条西5-20-303

サンオービル1F

TEL 011-717-8001 / FAX 011-717-8021

営業窓口.....中島正雄